コーパス・クリスティ祭とコヴェントリ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊澤, 喜章 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20533

明治大学教養論集　通巻541号
(2019・9) pp. 119-145

コーパス・クリスティ祭とコヴェントリ

熊　澤　喜　章

I

1264年，時の教皇ウルバヌス（Urbanus）4世は，キリストの最後の晩餐とキリストの定めた聖餐式とを祝う祭日を新たに設けたいとの意向を表明した。聖餐式とは，最後の晩餐でキリストが弟子たちにパンと葡萄酒を分け与え，これが私の肉と血であるとしたことから，ミサにおいてキリストの肉と血の実体的変化，すなわち「化体」として，聖別されたパンを食し，葡萄酒を飲む儀式である。ウルバヌス4世の意向が表明される50年近く前，すなわち1215年には，すでに聖体（the Blessed Sacrament）の全質変化の教義（the dogma of Transubstantiation）は教皇によって定められていた[1]。しかし，過去1200年近くにわたってつくりあげられてきた教会暦には，この新しい聖体の概念を十分に取り扱うための日は用意されていなかった[2]。新しい祭日である聖体祭（Corpus Christi）は，その後クレメンス（Clemens）5世のもとで，1311年のヴィエナ（Vienna）における公会議において制定が裁可された。祝祭日は三位一体の日曜後の木曜日，つまり精霊降臨祭の11日後と定められた。当時の暦では，5月20日から6月24日の間を動く祭日で，ちょうどヨーロッパでは昼間の時間が最も長い夏至の日近辺に開催され，日中の行事を執りおこなうには格好の日程であった。

1, V. A. Kolve, *The Play Called Corpus Christi*, Stanford, 1966, p.47.

2　グリン・ウィッカム著，山本浩訳『中世演劇の社会史』筑摩書房，1990年，86-8頁。

ここで多少なりともカトリックの典礼暦について簡単に述べておくことにしよう。キリスト教とりわけカトリック教会の典礼暦には多くの祝祭日があるが，この典礼暦で最も重要な儀式は，おそらくキリストの誕生を祝う降誕祭，すなわちクリスマスとキリストの復活（Resurrection）を祝う復活祭（Easter）であろう。キリストの誕生を祝うクリスマスは12月25日と祭日が決まっている。カトリックの典礼暦の新しい年度は，このクリスマスを準備する期間，すなわち待降節からはじまり，それはクリスマスの4つ前の日曜日，すなわち11月の末か12月のはじめ頃となる。2019年度では2018年12月2日が待降節第1主日となる。この待降節の期間は厳格な生活が求められる。この厳かな待降節の期間が終わるとともに，クリスマスに盛大な祝祭がおこなわれるのである。クリスマスから12日後の1月6日が，東方の3博士が誕生したイエスを礼拝した主の公現の日とされ，次の日曜日が主の洗礼の日となる。さらに，イエス誕生の40日後の2月2日が，聖母マリアがエルサレムの神殿で清めの式をおこない，幼子イエスを神に捧げた主の奉献の日となる。

次に復活祭であるが，復活祭は毎年祝祭日が異なる移動主日となっている。復活の主日は春分の日3月21日以降の満月の後の最初の日曜日とされ，現在の暦では3月27日から4月25日の間の日曜日とされる。2019年度の教会暦では4月21日（日）が復活の主日であり，その前日までの日曜を除く40日間が四旬節（Lent）とよばれ，復活祭を準備する期間とされる。この期間は厳粛な生活が求められ，イエスの受難がいかに苦しいものであったのかを心にとどめる期間である。この四旬節のはじまりの日は復活祭の46日前で，灰の水曜日とよばれ，信者の額に灰で十字のしるしをつける儀式がおこなわれる。なぜこのような儀式がおこなわれるようになったかについては諸説がある。

また，復活の主日から40日を経た木曜日が主の昇天（Ascension）の日とされ，その10日後がキリストの弟子たちに精霊が下ったことを記念する

精霊降臨の主日とされる。2019年は主の昇天が5月30日（木），精霊降臨の主日が6月9日（日）であり，復活の主日から精霊降臨の主日までの50日間は五旬節（Pentecost）ともよばれ，ひとくくりの祝日として祝われ，四旬節と違って歓喜に満ちた期間となる。

さらに，精霊降臨の主日の次の日曜が三位一体（Trinity）の主日となり，次の木曜日がキリストの聖体の祭日となる。2019年は，6月16日（日）と6月20日（木）である。この木曜日が祭日となる教会暦について，日本などの祝祭の催しに不都合が生じる場合には，次の日曜日にその祭日を移動させることが許されている。したがって，日本では主の昇天の祭日は6月2日（日），キリストの聖体の祭日は6月23日（日）となる。前にも述べたように，日本では梅雨の真っただ中であるが，ヨーロッパでは晴れの日が多く，昼の時間が長い時期で，お祭りをおこなうには最適の季節である。そして，8月15日が聖母の被昇天（Assumption）の日とされるが，カトリックの典礼暦にはその他にも多くの聖人の日や祝祭日がある。

ウルバヌス4世の大勅書（the bull *Transiturus*）は，イエス・キリストの受難が人類にとっていかに痛ましいものであるか，それに涙し，哀悼の意をあらわしつつ，受肉されたキリストの受難と死が，全人類のすべての罪を贖い，それによって全人類が救済されることを喜び，讃え，慶祝の意をあらわす内容となっている。すなわち，なんら罪のないキリストが十字架上で磔刑となり，その肉体が裂かれ，血が流れ，命を落としたことにより，アダムやカインにはじまる全人類の罪が贖われ，過去から現在にいたる全人類の救済へとつながったわけである。教皇は聖餐式のサクラメントをおこなうに臨んで，われらは敬虔なる涙のなかにおいて喜び，敬虔なる喜びのなかにおいて涙し，哀悼のうちに歓喜し，慶祝のうちに悼むと述べる。そしてキリストが最後の晩餐で弟子たちにみずからパンを裂き，葡萄酒をそそいで，これが受肉した自分の肉体であり血であるとしてそれを食させた最後の晩餐と同じ木曜日に，聖職者と信者が一堂に教会に集まり，人類の救済を喜ぶ賛歌をう

たうことを望んでいる。そこには教会と信者とが一体となり，主の受肉とその死の持つ意味を再確認すべきであるとする，教皇の強い意志が感じられる[3]。

ウルバヌス４世はキリストの聖体の祭日を，最後の晩餐と同じ木曜日としていたが，それは復活祭の３日前の聖木曜日ということになる。ところがこの最後の晩餐の日は，イエスが弟子たちの足を洗ったことから洗足木曜日（Maundy Thursday）ともよばれ，洗足式の儀式，悔悛者との和解の儀式，聖油の儀式等々がとりおこなわれる習慣がすでにできていた。もともと聖木曜日からはじまる復活祭前の３日間は特別な日とされ，重要な典礼や儀式がとりおこなわれてきたわけである。聖体の祝祭をおこなうには時間的に無理なため，この祝祭日が移動され，現在のような夏至に近い日程となったのであった。もともと，キリスト教は，冬至と夏至，春分と秋分という季節の変わり目におこなわれてきた，過去の異教の祝祭をキリスト教の典礼暦のなかに吸収しようとする動きがみられた[4]。冬至の日近辺の異教の祝祭はクリスマスに[5]，春分の日近辺の異教の祝祭は復活祭に集約してきたわけである。聖体の祝日を夏至の日近辺に設定したことの背景には，このお祭りを盛大に催し，夏至の日近辺の異教の祝祭をそのなかに吸収してしまおうとする意図もあったものと思われる。

3　この大勅書のラテン語原文の一部とその英語訳は，Kolve, *op. cit.*, p.45 に掲載されている。また，J. Taylor, 'The Dramatic Structure of the Middle English Corpus Christi, or Cycle, Plays', in J. Taylor and A. H. Nelson (eds.), *Medieval English Drama : Essays Critical and Contextual*, Chicago, 1972, pp.150-1 も参照。

4　A. W. Ward, 'The Origins of English Drama', in A. W. Ward and A. R. Waller (eds.), *The Cambridge History of English Literature*, Cambridge, 1970, pp.7-8.

5　C. Davidson, *Studies in the English Mystery Plays*, New York, (First Published 1892), 1965, pp.41-2.

II

教皇の大勅書は，祭日を必ず聖体を崇める行列でもって祝うよう定めていたが，その他の細かい行事は土地ごとの共同体のやり方にまかされた。当初は教会関係者や宗教団体が地域の主なる教会から聖体を運び出し，それを掲げて市中を練り歩いていたが，やがてこの行列，すなわち行進を組織するためにコーパス・クリスティ・ギルドが組織された[6]。聖体祭は1318年にイングランドに紹介され，イングランド各地にひろまっていったが[7]，コヴェントリにコーパス・クリスティ・ギルドが設立される1348年頃には，コヴェントリでもすでに町全体を巻き込む行事となっていた[8]。

ところで，1085年のドムスデイ調査（Domesday Survey）の時点では，土地に縛り付けられていた隷農（unfree villain）しかいなかったコヴェントリが，都市としての発展をみるのは，12世紀末，1181年頃にチェスター伯のチャーターにより，コヴェントリの住人に市民権（burgess）が認められてからであった[9]。その後順調に発展を遂げたコヴェントリは，やがて北端のビショップ・ゲート（Bishop Gate）をはじめとする12のゲートを備える城

6　石井美樹子『イギリス中世劇集―コーパス・クリスティ祝祭劇―』篠崎書林，1983年，7頁；同『中世劇の世界　よみがえるイギリス民衆文化』中公新書，1984年，20-1頁。

7　同時代の年代記（*Historia Mstriaeonasterii Sancti Petri Goucestriae*）に次のような記述が残されている。「コーパス・クリスティ祭に関する注。われらが主の1318年から，コーパス・クリスティ祭がイングランド全土の教会で一般的に祝われるようになった。」（H. Craig, *English Religious Drama of the Middle Ages*, Oxford, 1955, p.128 ; Kolve, *op. cit.*, p.37）。

8　ダニエル・ドナヒュー，伊藤盡訳『貴婦人ゴディヴァ―語り継がれる伝説』慶應義塾大学出版会，2011年，90頁。

9　F. Smith, *Coventry Six Hundred Years of Municipal Life*, Coventry, 1945, pp.21-2.

壁を建築し[10]，イングランド有数の都市としてその容姿を整えていく。中世都市としての発展が顕著となるのは1340-1440年頃であるが，この頃までに，コヴェントリの市民層は3つの階層にわかれていた。最上層が商人（merchants）と地主（landowners）で中間層が製造業者（manufactures）と商店主（shopkeepers），そして最下層が職人（journeymen），労働者（labourers），その他雑多な産業に従事する働き手である。

これらの階層のなかで，町の政治・経済・社会における権力と威信を誇っていたのは，商人と絹物商（mercers）や反物商（drapers）であった[11]。この社会の最上層部が1340年に組織したコヴェントリ最初のギルドが，聖メアリのギルド・マーチャント（the Guild Merchant of St. Mary）である。これは宗教ギルドであるとともにマーチャント・ギルドでもあった。このギルドに土地所有を認めるような資格をもたせ，新しいチャーターのもとに組織されたのが1364年に設立された聖トリニティー・ギルドであり，聖メアリのギルド・マーチャントはこの新しく設立されたギルドのなかに吸収され，コヴェントリ第一のギルドとなったのである[12]。この聖トリニティー・ギルドと先ほど述べたコーパス・クリスティ・ギルドとがコヴェントリの2

10　C. Gill, *Studies in Midland History*, Oxford, 1930, p.6.

11　*The Victoria History of the County of Warwick*, Vol.VIII, London, 1969, p.209. 中世のイングランドでマーチャントといわれた人々は，特定の商品を取り扱う商人ではなく，ひろく国内の主要都市や外国との取引網をもつ富裕商人であった。また，絹物商なども，単に絹織物関係の取引をおこなっていた商人ではなく，さまざまな高級品を商う人々であった。詳しくは，R. M. Berger, *The Most Necessary Luxuries. the Mercer's Company of Coventry, 1550-1680*, Pennsylvania, 1993を参照。

12　T. Smith, *English Guild*, London, 1870, pp.226-38 ; M. D. Harris (ed.) , *The Register of the Guild of the Holy Trinity, St. Mary St. John the Baptist and St. Katherine of Coventry*, London, 1935, p.xiii. 聖トリニティー・ギルドはその後，St. John the Baptistギルドと St. Katherineギルドとを合併し，最終的に上記のような名称となった（B. Poole, *Coventry: Its History and Antiquities*, London, 1870, p.30）。

大ギルドであり，市長などの町の重職はこれらのギルドのメンバーから選出されるのが慣例であった[13]。

この2つのマーチャント・ギルドあるいは宗教ギルドの下に，それぞれの職種から構成されていたクラフト・ギルドがあった。これらのギルドを構成する人々はまさに町の中間層を代表する人々であり，なかには町の重職に選ばれる人々もいた。15世紀の中頃には，コヴェントリには少なくとも23のクラフト・ギルドがあったようである[14]。彼らは率先して町の催しに労力や資金を提供し，時として武装した軍務の提供にもたずさわる人々であった。また，クラフト・ギルドの下には，町の最下層を構成する労働者の一団がいたが，彼らのうち，職人層は独自のギルドを結成することが許されており，聖アン（St. Anne's）のギルドや聖ジョージ（St. George's）のギルドなどは職人層が結成したギルドであった[15]。さらに彼らと同じ階層にはさまざまな仕事に従事する労働者もいたが，彼らもれっきとした市民であった。市民にはそれなりの権利もあれば，それに見合った義務も生じてくるのは当然のことである。それが自治都市のなかでの社会秩序，階層構造にあらわれてくるのである。

さて，聖体祭の行進において，導入当初は地域の主要な教会が行進を組織し，聖体を掲げ，その後を司祭や町の重職たちが付き従い，町の主要道路や各教区の教会等を練り歩いたであろうが，やがて各地域でこの行進を差別化しようとする試みが生じてくることは，自明の理であった。晴れの日が多

13　G.Templeman（ed.），*The Records of the Guild of the Holy Trinity, ST. Mary ST. John the Baptist and ST. Katherine of Coventry*, Oxford, 1944 の Appendix Ⅰには1420年から1547年までの市長の名前と職業，ならびに同期間の聖トリニティー・ギルドの会長（Master）の名前が記載されている。さらに，Pool, *op. cit.*, pp.370-3には，1345年から1868年までの市長の名前（一部は職業も）が記載されている。

14　Pool, *op. cit.*, p.33.

15　*The Victoria History of the County of Warwick*, Vol.VIII, p.211.

く，昼が一番長い夏至に近い日に催されるお祭りである。できるだけ地域周辺の注目を集めるように行進が工夫されたのであった。お祭りが人気となり，都市周辺の人々の関心を集めるようになれば，それはやがて遠方の人々にも知れ渡り，多くの人々がお祭りを目当てにその町を訪れるようになる。それは町の名声を高めるとともに，商談等をはじめる契機ともなるのであった[16]。とするならば，その際に多くの労力や資金を負担するのが，町の中間層の人々となることは当然の帰結であり，彼らには聖体の行進を先導する役割があたえられたのであった。

やがて先導役を任された商工業組合の人々は，この行進を一層華やかなものにしようと，聖体祭にふさわしい演出を取り入れたのであろう[17]。それが旧約聖書から新約聖書に至るまでの聖書の物語の一場面を再現したように行進することであった。教皇ウルバヌス４世がコーパス・クリスティ祭を制定しようとした意図は，前述したように，なんら罪のないキリストが十字架上で磔刑となり，その肉体が裂かれ，血が流れ，命を落としたことにより，アダムやカインにはじまる全人類の罪が贖われ，過去から現在にいたる全人類の救済へとつながったことを祝うためであり，この意図を汲むには旧約聖書の部分を含み，最後の審判にまで至る聖書の全体像を理解する必要があった。そのための演出が行進のなかに取り入れられたのである。

当初は，聖書のなかにあらわれる個々の場面を想像させるような人物の衣装やそうした人々をあらわす象徴的なものを持って行進したであろう。それは楽園の知恵の木であったり，モーゼの石板であったり，磔刑の十字架であったりしたであろう。それらはやがて移動する山車の上にのった聖書の一場面となり，それが民衆の理解する言葉で話をする短い劇へと発展していっ

16　M. James, 'Ritual, Drama and Social Body in the Late Medieval English Town', *Past and Present*, No.98, 1983, pp.12-4.

17　W. Creizenach, 'The Early Religious Drama, Miracle-Plays and Moralities', in Ward and Waller (eds.), *op. cit.*, p.45.

たと想像することもできる[18]。

そこで困った問題が持ち上がってきた。行進の魅力をたかめようと先導役のクラフトたちの演出がこみいった複雑なものになり，人々の関心を集め，行進の評判が高まるほど，行進のいわば前座の部分に時間がかかり，肝心の聖体や教会関係者，町の重職たちは長い時間道路上で待たされることになってしまったのである。順番を入れ替えて，クラフトたちの山車を聖体の後ろに持ってきても，事の次第は同様であった。聖体はあっという間に通り過ぎていくが，劇を上演する山車はそこかしこで停まり，行進の終了が日没後になることもあったであろう。そこで聖体祭の組織者たちは，聖体の行進と聖書の物語を演ずる劇とを分離し，祝祭日の早朝に行進をおこない，その後に聖書劇を上演するか，劇の上演を次の日かまったく別の日にするよう，日程

18　Davidson, *op. cit.*, p.91-4 : E. K. Chambers, *The Mediaeval Stage, Vol. II* , Oxford, 1903, pp.95-6. クレイグ（H. Craig）はこうした見解に反対の立場をとっている。彼によれば，行進と劇とはまったく違う性格や目的があったのであり，行進はきわめて庶民的なものであるのに対し，劇はそれとは独立して発展してきたものであった。劇はいわば1年間のすべてのミサのミニチュア版（the whole service of the year in miniature）であり，それがウルバヌス4世の意を汲むことになるのであると。詳しくは，H. Craig, 'The Corpus Christi Procession and the Corpus Christi Play', *Journal of English and German Philology*, Vol.xiii, 1913, pp.599-600 を参照。また，ピアソン（M. Pierson）やブレア（L. Blair）も，当時の教区委員会の帳簿（churchwardens' accounts）や他の資料を調査した結果，ピアソンが仮定した行進から劇への変化の5段階，すなわち，Ⅰクラフツたちのただの行進　Ⅱクラフツたちの紋章旗をもった行進　Ⅲ無言劇（Mute Mysteries）　Ⅳ言葉を使った劇　Ⅴ行進からの劇の分離，という過程をへて，行進のなかから劇が派生したような資料はほとんどみつからなかったという。詳しくは，M. Pierson, 'The Relation of the Corpus Christi Procession to the Corpus Christi Play in England', *Transactions of the Wisconsin Academy of Sciences, Arts, and Letters*, Vol.XVIII, part i, 1915, pp.110-65 ; L. Blair, 'A Note on the Relation of the Corpus Christi Procession to the Corpus Christi Play in England', *Modern Language Notes*, Vol.55, No.2, 1940, pp.83-95 を参照。

を変更したのである[19]。こうして聖体祭を祝うためのコーパス・クリスティ劇が行進と切り離され，独自に発展するようになったのであった。

コヴェントリでは聖体祭当日の早朝に聖体の行進をはじめるようにした。商工業者の組合の山車（train）に先導されて，聖餐式のパン（the Host）を掲げた聖トリニティー・ギルドのメンバーたち，あるいは司祭たちが登場し，この聖体のあとに各種の町の宗教団体が，おそらく徒歩で続いた。コーパス・クリスティ・ギルドは豪華なうつわを用意し，その中に聖別されたパンが納められている。それを覆うために高価な装飾を施した天蓋が，ギルドのメンバーによって雇われた4人の市民によって支えられた。また，宗教的儀式の効果は，ギルドの宝物保管庫からだされた紋章旗や十字架によってたかめられたのであった[20]。先導役をつとめた商工業組合の人々は，行進の後で催される祝祭劇のお触れでもあるわけである。

行進がおこなわれている間に劇の準備がすすめられたが，それに出演する役者たちも行進に参加した。コーパス・クリスティ・ギルドには，ゆりの花を持つ大天使ガブリエル，高価な銀の冠を頭にのせた聖母，12使徒，8人の処女，聖マーガレット，聖キャサリンを演じた人々に支払がなされた記録が残っているし，鍛冶工組合は，後の舞台でヘロデ（Herod）役を演ずる役者が，行進で馬に乗る際の豪華に装飾された外套の費用を負担したのであった[21]。こうして，聖体祭の行進は町全体を巻き込む一大ページェントとして実行されたのである。そしてその後には，民衆が最も楽しみとしていた劇

19　Davidson, *op. cit.*, pp.93-4 ; M. L. Spencer, *Corpus Christi Pageants in England*, New York, 1911, p.70 ; R. Woolf, *The English Mystery Plays*, London, 1972, p.74.

20　M.D.Harris, *Life in an Old English Town: A History of Coventry from the Earliest Times Compiled from Official Records*, London, 1898, p.340 ; M.D.Harris, *The Story of Coventry*, London, 1911, p.287.

21　T. Sharp, *A Dissertation on the Pageants or Dramatic Mysteries Anciently Performed at Coventry*（1st published in Coventry, 1825）, with a New Foreword by A. C. Cawley, Wakefield, 1973, pp.161-7.

が，町の総力をあげて上演されたのである。

Ⅲ

コーパス・クリスティ祭で上演される祝祭劇は，ミステリー劇（mystery play）あるいはサイクル劇（cycle play）と呼ばれていた。ミステリー劇は，よく「神秘劇」あるいは「奇跡劇」と訳されてきたが，ミステリー劇の "mystery" はラテン語の "ministrium" に語源をもつフランス語の "mystère" に由来する言葉で，"craft" あるいは "trade"，すなわち職業を意味する言葉であった[22]。劇の上演に際しては，コヴェントリの多くのクラフト・ギルドがかかわっており，舞台装置の作成や実際の出演者まで，多大な出費と労力を彼らが負担したのであった。また，サイクル劇と呼ばれた所以は，各劇が短い劇で作成されて，それらを集大成すると遠大な聖書の物語となっているためで，たとえばヨーク・サイクルは50近い劇で構成されていたし，コヴェントリ・サイクルは10演目で構成されていた。

このコーパス・クリスティ劇は，ヨーロッパ大陸の多くのキリスト教国においてもおこなわれていたが，イングランドでは，ビヴァリー（Beverley），チェスター，コヴェントリ，イプスウィッチ（Ipswich），ケンダル（Kendal），リンカン（Lincoln），ニューカッスル・オン・タイン（Newcastle-on-Tyne），ノリッチ（Norwich），ウエイクフィールド（Wakefield），ヨーク，カンタベリー，ランカスター（Lancaster），ルース（Louth），プレストン（Preston）等の都市で上演されていたようである[23]。またロンドンでも上演されていた形跡があるが，確固とした資料は残されていない。イングランドでは宗教改革の影響で，各地で上

22　石井美樹子『イギリス中世劇集』，5頁：同『中世劇の世界』，18-9頁。

23　R.T.Davies, *The Corpus Christi Play of the English Middle Ages*, London, 1972, p.23. なお，Chambers, *op. cit.*, pp.329-461 の Appendix W and X には，中世イングランドの宗教劇の膨大な資料の調査が掲載されている。

演されていたコーパス・クリスティ劇は16世紀の終わりころにはすべて廃止に追い込まれ，資料が散逸してしまったり，ロンドンの大火にみられるような災害によって失われてしまったりしたものと思われる。

このサイクル劇の台本がほぼ完全な形で残っているのは，チェスター，ヨーク，ウエィクフィールド[24]，ルーダス・コヴェントリエ（Ludus Coventriæ）の4つである[25]。ルーダス・コヴェントリエは長らくコヴェントリ・サイクルのものと思われていたが，これは資料分類の際の不注意な間違いによるもので，現在ではN-Town（不特定の町の意）Playともよばれ，使われている方言から，おそらくリンカンで上演されていたものと考えられている[26]。

さて，これらのサイクル劇には共通する以下のような特徴がある。

まず第一に劇の台本，つまり台詞が，民衆が当時実際に話していた地元の言葉（vernacular）で書かれていることである。これは中世の演劇が教会内の典礼（liturgy）や祭儀（ritual）[27]にそのルーツをもっていることを考える

24　ウェイクフィールドはヨーク近くの町であり，このサイクルの台本にウェイクフィールドという地名が出てくることから，そこで上演されたものと推測されている。また，その台本の写本が伝えられたランカシャーの家族の名前から，タウンリー（Towneley）・サイクルともよばれている（奥田宏子『中世英国の聖書劇　神と人へのスペクタクル』研究社選書，45頁）。

25　「ルーダス」あるいは「ルードゥス」はラテン語の“ludus”で，英語では娯楽をあらわす“recreation”，闘技・遊戯をあらわす“game”，遊び・劇をあらわす“play”のいずれにも訳すことが可能であり，中世の演劇を表現する際に重要な意味をもっていた。詳しくは，ウィッカム，前掲書，3-6頁；Kolve, *op. cit.*, pp.12-3を参照。

26　ルーダス・コヴェントリエに関しては，J. O. Halliwell（ed.）, *Ludus Coventriæ. A Collections of Mysteries, Formerly Represented at Coventry on the Feast of Corpus Christi*, London, 1841；K. S. Block（ed.）, *Ludus Coventriæ or The Play called Corpus Christi Cotton MS. Vespasian D. Ⅷ*, London, 1922；S. Spector（ed.）, *The N-Town Play Cotton MS Vespasian D.8*, Oxford, 1991を参照。

27　典礼と祭儀に関しては，ウィッカム，前掲書，31-2頁を参照。中世劇が教会の典礼から発展してきた過程に関しては以下のような詳細，かつ膨大な研究があ

と，演劇の中心となる演技者が聖職者から世俗者へと転換していく大きな節目となった。

当時の教会における典礼や祭儀は，通常ラテン語でおこなわれていたが，そのなかには劇的構成をもつ部分が含まれており，やがてそれが演劇的なやり方で執りおこなわれるようになった。聖書に書かれている一場面が，聖職者の手によって演劇へと発展していったのである。しかし，こうしたラテン語による典礼や祭儀あるいはミサは，民衆には理解できなかったため，通常，ミサの後に聖職者がその土地の言葉で聖書の相当する部分を説教という形で話をした。教会内におけるステンドグラスや壁画等は，これらの内容を説明する際の視覚的な手助けとしての役割をはたした。

こうして教会のなかで演劇の萌芽が育っていったが，この聖職者によってラテン語で演じられる劇は，それを観る世俗の平信徒（laity）にとってみればあまりにも荘厳（solemn）であり，それを演じる聖職者（clergy）にとってみれば何とも気恥ずかしい（frivolous）ものであった[28]。この情況を解決するには，その地方の言葉をもちい，世俗の人々によって演じられる劇が必要であった。こうして演劇がおこなわれる場所としての演劇空間[29]は，教会の内部から外へと展開していくことになった[30]。当然，教会の外部で上演され

る。K. L. Bates, *The English Religious Drama*, New York, 1893 ; E. K. Chambers, *The Mediaeval Stage, Vol. I , Vol. II* , Oxford, 1903 ; K. Young, *The Drama of the Mediaeval Church, Vol. I , Vol. II* , Oxford, 1963 ; G. Wickham, *Early English Stages 1300-1660 : Volume One 1330 to 1576*, London, 1963 ; O. B. Hardison Jr., *Christian Rite and Christian Drama in the Middle Ages : Essays in the Origin and Early History of Modern Drama*, Baltimore, 1965.

28　Woolf, *op. cit.*, p.84.

29　この演劇空間をさすラテン語が「プラテア（platea)」であり，サイクル劇でも，それがどのような形で上演されたかを考察する際に重要な要素となる。詳しくは，ウィッカム，前掲書，48-9 頁を参照。

30　Ward, op., cit., pp.10-5.

る劇で使われる言葉は，その土地の言葉となったのである。

もちろん，演劇空間が教会の内部から外へ，劇で使われる言語がラテン語から地元の言葉へ，という転換が同時におこり，それがコーパス・クリスティ劇に直線的に発展していったというものではない。教会の内部でも地元の言葉による劇が演じられていたこともあるし，民衆は民衆でその地に伝わる素朴な劇を独自に演じていたであろう[31]。演劇のジャンルとそのルーツに関しては多くの議論があるが，コルヴ（V. A. Kolve）が述べるように，それを決める要因として，演劇空間の移行と言葉の選択はそれほど決定的なものではなかったのかもしれない[32]。しかし，コーパス・クリスティ劇が民衆のなかに根付き，それがイギリス中世演劇の中心となって発展していくには，地元の言葉で上演されることが是非とも必要であった。

1526年にウォリックシャー（Warwickshire）のある村でおこった次のような話が残っている。ある聖職者が，自分は教会書記（clerk）でもなく，大学も出ていなかったが，毎週日曜日に教区民に対して使徒信教（Creed）に関する説話をおこなっていた。彼がよくいっていたことは，もし，あなたがたが私の話を信じることができず，私の権威を疑い，真実の話を聞きたいと願うならば，コヴェントリにいきなさいということであった。彼がいうには，そこであなたがたはコーパス・クリスティ祭で演じられる劇によって，聖書の内容を十分に理解することができるであろうというものであった[33]。お祭りで多くの人々が集まり，そこで地元の言葉で宗教劇が上演され，それによって聖書の内容を民衆により詳しく理解してもらうことができれば，教

31　中世イングランドの演劇における世俗劇の影響に関しては，H. Child, 'Secular Influences on the Early English Drama, Minstrels, Village Festivals, Folk-Plays', in Ward and Waller（eds.）, *op. cit.*, pp.24-35 を参照。

32　Kolve, *op. cit.*, pp.33-5.

33　Davies, *op. cit.*, p.16 ; P. M. King and. C. Davidson（eds.）, *The Coventry Corpus Christi Plays,* Michigan, 2000, pp.1-2.

会にとってみてもコーパス・クリスティ祭におけるサイクル劇の上演は願ってもない好機だったといえるであろう。

第2の特徴は，4つのサイクル劇がすべて旧約聖書の内容を含むことである。コーパス・クリスティ祭が全人類の救済を祝うのであれば，それは神による天地創造の物語や，アダムによる原罪の物語，カインによる最初の殺人の物語から劇をはじめなければならないであろう。しかしそれ以上に，新約聖書の記述の仕方は旧約聖書に登場する預言者の預言の成就という形をとっている。いわば，旧約聖書の物語は新約聖書の予像となっているのである。

上記の4つのサイクル劇とは別に，当時人気を博したサイクル劇にコヴェントリ・サイクルがある。現存するコヴェントリ・サイクル劇は，受胎告知，キリスト降誕，3博士の礼拝，幼児大虐殺をカヴァーするやや長めの「裁断師と仕立屋の劇」と，聖母マリアの浄め，少年イエスの神殿内での議論をカヴァーする「織布工組合の劇」の2つのみとなっている。もともとは，10の劇から成り立っていたと思われるが，すべて新約聖書にまつわる内容であっただろうと推測されている[34]。旧約聖書に題材をとった劇は存在していないが，たとえば，「裁断師と仕立屋の劇」の冒頭には旧約聖書の預言者イザヤが登場し，旧約聖書での預言を台詞のなかで披瀝してそれがどの

34　2つのコヴェントリ・サイクルに関しては，H. Craig, *Two Coventry Corpus Christi Plays*, Second Edition, Oxford, 1957 ; King and Davidson, *op. cit.* を参照。また，古い資料として，「裁断師と仕立屋の劇」に関しては，*The Pageant of the Company of Shearmen and Taylors, in Coventry*, Coventry, 1817 ; Sharp, *A Dissertation on the Pageants* :「織布工組合の劇」に関しては，*The Presentation in the Temple : A Pageant, as Originally Represented by the Corporation of Weavers in Coventry*, Edinburgh, 1836 がある。いずれも郷土史家のトーマス・シャープ（Thomas Sharp）によって，原典の写本から転写されたものであるが，写本自体は1879年に所蔵されていたバーミンガム図書館の火災により焼失してしまった。

ように新約聖書のなかで成就するかが説明される。こうした預言者劇[35]のような手法を取ることにより，旧約聖書の内容が提示されるような工夫が劇のなかに埋め込まれているのである。ちなみにコヴェントリ・サイクルは，当時大変な人気を博したため，多くの王族がこの劇を見るためにコヴェントリを訪れている。王族が訪問した際には，コーパス・クリスティ祭の祝日以外にも特別に劇が上演され，彼らから多大な愛顧を得たのであった[36]。

第3の特徴は，ルーダス・コヴェントリエを除いて，すべてのサイクルがクラフト・ギルドによって台本が管理され，上演されていたことである。ルーダス・コヴェントリエは台本が宗教ギルドによって管理されており，最も宗教色が濃い。しかし，上演にあたっては町の構成員の協力が必要であったために，やはりクラフト・ギルドの面々が活躍したであろうことは容易に想像できる。

サイクル劇が盛んにおこなわれていた時代は，チョーサー（Chaucer, 1340頃～1400）の時代からシェークスピア（Shakespeare, 1564～1616）の時代にいたるおよそ200年間である。そして14世紀中葉から16世紀にかけては，イングランドで多くの都市が発展した時代でもあった。こうした時代を背景として，このサイクル劇では，都市の住民，とりわけ製造業者であり，町の中間層を形成するクラフト・ギルドの構成員が重要な役割をになうこととなったのであった[37]。

その負担は上演の準備にはじまり，台本の改定，舞台の作成や補修，プロの役者との交渉やリハーサル，そして実際の上演といったようにあらゆる分

35　預言者劇に関しては，ウィッカム，前掲書，58-76頁；奥田宏子，前掲書，27-30頁を参照。

36　Craig, *Two Coventry Corpus Christi Plays*, pp.xx-xxii；石井美樹子『中世劇の世界』，36頁。

37　M. D. Anderson, *Drama and Imagery in English Medieval Churches*, Cambridge, 1963, pp.46-7；Davies, *op. cit.*, pp.34-6.

野におよんでいる。彼らは出演者であると同時に，劇の費用の負担者でもあった。コヴェントリでは劇を上演するための税金（paggent sylu*er*）がそれぞれのクラフト・ギルドに要求されたし[38]，劇が上演できなかった場合には，罰金の徴収もおこなわれた[39]。ここまでの努力をして劇を上演するということは，それが都市のなかでの彼らの社会的地位を確定する要素であったからである。いわばコーパス・クリスティ祭とそこにおける劇の上演は，彼らの威厳と誇りを民衆に示す最も華々しい舞台であったのである。

さて，第4の特徴は，これらの劇がすべて野外で上演されたことである。上演のための舞台として最も有名なのは，車輪がついた山車のような移動舞台としてのページェント・ワゴン（pageant-wagon）[40]であろう。これは大きなものでは大型バスくらいの大きさがあり，4つの車輪だけでは支えきれないために6つの車輪のついたものもあった[41]。大掛かりなワゴンでは，車輪の上に2段の舞台が設置され，舞台の下の車輪がある部分は，出演者の着替えや控室として使われたが，その部分をも地下の舞台とすれば3段の舞台となり，天国・地上・地獄の3つの場面がひとつのワゴンで上演できることになる。このワゴンの建設と補修には，多大な費用がかかったことはあきらかであろう。くわえて，コヴェントリでは織布工組合のワゴンを収納するためのページェント・ハウスを建てるために，ミル・レーン（Mill Lane）に

38　R. W. Ingram (ed.), *Records of Early English Drama : Coventry*, Toronto, 1981, p.26（以下 *REED : Coventry* と表記）; M. D. Harris (ed.), *The Coventry Leet Book : or Mayor's Register. Part I - IV*, London, 1907-8, 1909, 1913, p.716（以下，*Leet Book* と表記し，通し頁数のみを記載する）.

39　*Leet Book*, p.116. 同じようなペナルティーはヨークシャーのビヴァリーでも課されていた（Chambers, *Mediaeval Stage Vol. II*, pp.339-40）。

40　ページェントという言葉は，この移動舞台をあらわすものとしても，また，そこで上演される劇をあらわすものとしても使われ，さらに大掛かりの催し等にも使われる場合があった。

41　Spencer, *op. cit.*, pp.86, 133.

幅30.5フィート，奥行き70.5フィートの土地までもが用意されたのである[42]。

さらに劇はこれらの舞台上のみで演じられたのではない。場面の要求にしたがって，劇を上演するための臨時の舞台として一時的な足場（scaffold）が設置される場合もあったし，ワゴンが置かれた道までが舞台となる場合もあった[43]。実は，各地のサイクル劇がどのように上演されたかについては，明確な資料が残っていないため，これまでさまざまな憶測がなされてきた[44]。ヨーク・サイクルのような50に近い劇を一日で上演することは，たとえひとつひとつの劇が短いものであっても，物理的に無理なことであった。

上演にあたって考えられうることは，たとえばかなりの大きさの広場があった場合，その中央に円形の中心舞台を置き，その周りを観衆が取り囲み，その観衆の隙間に4～5台の移動舞台を配置する方法である[45]。移動舞台は固定されたままでその場からは離れない。これらの移動舞台と観衆の席とが隙間なく配置されれば，劇を観る人々から料金を取ることも可能である。このような配置にすれば，劇を観る観衆は上演されるすべての劇を観ることができる。ただし，この方法では席を確保できた観衆だけが劇を楽しむことができ，町を訪れたその他多数の民衆はせっかくのコーパス・クリスティ祭を十分に楽しむことができない。

もうひとつの方法は，コヴェントリ・サイクルでおこなわれたであろうと

42　*The Presentation in the Temple*, p.25.

43　Wickham, *op. cit.*, p.169. 反物商の劇で，1557年と1566年に梯子に対する支出が記録されている（Sharp, *A Dissertation on the Pageants*, p.74）。おそらく，役者が舞台上から道へ降りるために使われたのであろう。

44　タウンリー・サイクルの上演形態，すなわち「巡行形式（procession style）」か「固定形式（stationary style）」かに関する研究者間の意見の相違に関しては，イギリス中世演劇研究会編『*The Six Pageants in the Towneley Cycle* 中世ウェイクフィールド劇集』篠崎書林，1987年，9-12頁を参照。

45　ウイッカム，前掲書，図20を参照。

想定されているもので，移動舞台の特色をいかし，ひとつのページェント・ワゴンがひとつの劇を上演し，上演し終わったら次の場所へ移ってもう一度同じ劇を再演し，これを繰り返していくというものである。もちろん第1のページェント・ワゴンの後には第2の劇を上演するワゴンが続き，同じように劇を上演していく[46]。コヴェントリにはこうしたページェント・ワゴンが停車する10のステーション（station）がそれぞれの街区にあったことがあきらかにされている[47]。

この方法では，観客はひとつのステーションに陣取っていれば，すべての劇を観ることができる。ただしこの方法では，上演するほうは同じ劇を一日十回も上演しなければならず，体力的にかなりの困難がともなう。また，劇の長さはそれぞれの台本から考えて，かなりの違いがある。コヴェントリ・サイクルの最初の劇は「裁断師と仕立屋の劇」で，内容は受胎告知・エリザベスの来訪・ヨゼフの疑惑・ベツレヘムへの旅とキリスト生誕・羊飼いの礼賛・東方博士の礼賛・エジプト逃避・ヘロデの幼児虐殺にいたるかなり長めの劇で，台本からみると1時間ほどもかかりそうな劇である。これに続く劇はたとえ上演時間が20分程度であったとしても，ステーションが空くまで，前の場所で待機していなければならない。

かりにこの方法で上演したとするなら，最初の劇が10番目のステーションで劇をはじめる頃に，最後の劇が最初のステーションで劇をはじめることとなり，最後の劇が10番目のステーションで劇を終了する頃には，夜があけてしまいそうである。また，あらかじめワゴンをそれぞれのステーションに配置しておき，第1のステーションで第1の劇が終了したのち，しばらく時間をおいて第2のステーションで第2の劇を演ずる方法も考えられる。こ

46　Creizenach, op. cit., p.45.

47　Craig, *Two Coventry Corpus Christi Plays*, pp.xiii-xiv.

れならば上演時間は8時間程度に短縮できるであろうが[48]，町の通りは次の劇，ないしは次の次の劇を観ようとする民衆でごったがえすことになってしまいそうである。

こうしたことを考えると，最もありそうな方法は，ワゴンは指定された10のステーションで一時的に停車するが，劇を上演するのはそのうち2～3回だけとする方法である[49]。この方法では町の通りや広場で同時に3～4つの劇が上演されており，観客の分散化がはかられる。コーパス・クリスティ劇は，台本が大幅に改訂された場合を除いて毎年ほぼ同じ内容で上演されており，毎年のようにこのお祭りに集う民衆はすべてを観る必要はないと考えるであろうことは十分に想定できる。5年，いや3年もこのお祭りに来れば，すべての劇を観ることができたであろう。

以上のように，コーパス・クリスティ劇は，町の総力を結集し，1年で一番昼の時間が長く気候も安定した時期におこなわれる最高にして最大のイヴェント，あるいはページェントであった。華やかな行進，それに続くスペクタクルな劇，祝祭を楽しむ多くの人々，それらは町の人々ばかりでなく，そのために町にやってくる多くの観客に開放感を与え，生活の喜びを感じさせるものであった。その喜びを神に感謝し，受難と死をもって全人類の罪を贖ったイエス・キリストの聖体を崇めることが，このお祭りの主旨であっただろう。そのためにもキリストの生涯をあつかった劇の上演はこのお祭りに欠かせないものとなったのである。

48　1457年，ヘンリ6世の妃マーガレット・オヴ・アンジュー（Margaret of Anjou）は，5月31日にコヴェントリでコーパス・クリスティ劇を観るためにケニルワース（Kenilworth）からコヴェントリに赴いた。その際，王妃が宿泊している宿の前で，どこの上演場所よりも先に劇が演じられるようにアレンジをしたが，思わぬ遅延により，反物商の最後の審判の劇が日没のために上演できなくなってしまったという（*Leet Book*, p.300 ; *REED : Coventry*, p.37 ; King and Davidson, *op. cit.*, p.2）。なお，ヘンリ6世はばら戦争時の一時期，宮廷をコヴェントリへと移動したことがある。

49　King and Davidson, *op., cit.*, pp.9-10 ; R. Ingram, 'The Coventry Pageant Waggon', *Medieval English Theater*, No.2, 1980, p.11.

Ⅳ

ウルバヌス4世の大勅書が出されたころ，十字軍の熱狂はすでにさめており，聖地奪回の目的は最終的に失敗におわる。これによって東西交易が活発になり，イタリアの諸都市が繁栄するようになったともいわれているが，ヨーロッパの人々はみずからの強欲さと，イスラム文化の精緻さを思い知ったことであろう。その後教皇となったボニファティウス（Bonifatius）8世はフランス王フィリップ4世と聖職者課税問題で争い，ローマ近傍のアナーニ（Anagni）で捕らえられ，乱心のうちに憤死した。フィリップ4世はその後，教皇庁をフランス南部のアヴィニョン（Avignon）に移し，教皇クレメンス5世を呼び寄せてみずからの監視下に置く。1311年のヴィエナにおける公会議において，聖体祭の制定を裁可したクレメンス5世はこのような状況にあったのである[50]。教皇権の失墜は誰の目にもあきらかであり，フランスやイングランドでは国王の権力が伸長していった。

聖体祭の制定とそのすみやかなヨーロッパ各地への普及とは，カトリック教会が聖地奪回や聖遺物探究等の信仰の物質的対象の追求から，信仰の内面の追究へと変化していったことの表れであるとも考えられるであろう。また14世紀後半以降，イングランドではウィクリフ（Wycliffe）を中心とするロラード派（Lollards）の活動が活発化する。コヴェントリは，このロラード

50　クレメンス5世は教皇への選出にあたりフィリップ4世の支援をとりつけるが，その折に6つの条件を提示され，その6番目の条件は対象をあきらかにしない件についての国王への白紙委任状であったといわれている。クレメンス5世は教皇就任後，この6番目の条件が当時大きな財力を誇っていたテンプル騎士団壊滅の件であったと聞かされ，色を失ったという。教皇にはもはやフランス王に抵抗する力は残っていなかった。詳しくは，篠田雄次郎『テンプル騎士団』講談社学術文庫，2014年，125～71頁を参照。

派の活動拠点でもあったのであり[51]，教会への批判が次第に表面化しつつあった[52]。民衆へカトリック信仰の教義をより一層明確にしめすためにも，教会が積極的に聖体祭の行進と劇の上演を支援したことであろうことは十分に考えられる。教会は失墜した権威を取り戻すべく，みずから改革をすすめていったのであろう。

では，民衆はどのような状況にあったのであろうか。14世紀中頃からヨーロッパでは黒死病が脅威の広がりをみせ，人々は常に死の恐怖と隣り合わせにあった。死の恐怖に打ち勝ち，来るべき審判の日にむけて安寧なる日々をおくるためには，信仰の力にまさるものはなかった。隣人の死に直面して，明日は我が身かと不安を覚えた人々は，死亡した隣人の魂の救済のために，またみずからの魂の救済を確実にするために，教会や宗教団体への寄進をおこない，それが荒廃した教会の再建やギルドの基盤形成に寄与したとも考えられる。コヴェントリでは諸処のギルドにより，中心的な教会である聖ミカエル教会や聖トリニティー教会に専用の礼拝所（chapel）が設けられ，それが教会の増築や改築へとつながっていった[53]。

一方，領主層は黒死病による人口減少から，農奴の賦役による直営地経営を維持することができず，農奴制の廃止や地代の金納化をおしすすめていった。窮乏化する領主層は，封建制の復活を夢見て反動的に農奴制を維持しようとするが，農民たちはこれに対し反乱をおこす。フランスではジャックリー（Jacqerie）の乱が，イングランドではワット・タイラー（Wat Tyler）の乱が生ずる。ワット・タイラーの乱の思想的指導者であるジョン・ボール（John Ball）はウィクリフの思想に心酔する聖職者であったが，乱が失敗に

51　コヴェントリにおけるロラード派の活動とその審問に関しては，S. McSheffrey and N. Tanner, *Lollards of Coventry, 1486-1522.* を参照。

52　James, op. cit., pp.27-8.

53　Anderson, *op., cit.*, p.44 ; *The Victoria History of the County of Warwick.* Vol. VIII, p.211.

終わった後，親類を頼ってロラード派の拠点コヴェントリへと逃げ込むがそこで捕らえられ，その後投獄された[54]。ワット・タイラーの乱は失敗におわったが，領主層の没落は明白であった。

これに対して，14～15世紀に著しい成長をみせたのが中世都市であった。商品・貨幣経済の発達のもと，イタリアの遠隔地貿易にかかわる都市ばかりでなく，ヨーロッパ各地に都市が発展していった。イングランドでもことは同様であった。各地に分散する定期的な市場機能をもつ集落は，その地の領主から，あるいは国王からも自由な市民であることを保障するチャーターを獲得し，農奴的隷属から解放され，都市を形成していった。やがて都市は城壁を築き，周辺の農村とは異なる中世社会の結節点として，すなわち商品や人，情報や文化等が行き交うターミナルとしての役割を果たしていく。

都市に住む人々にとっては，その地は周辺の農村とは異なる特権を有する地域として認識され，彼らはみずからをその都市社会を構成する特別の存在であると意識していたであろう。だからこそ，彼らは都市に居住することによって生ずるさまざまな負担にも快く応じたのである。それはさまざまな税負担，すなわち城壁や橋を補修・維持するための税負担であったり，町で催されるお祭りの経費や労力の負担であったりしたであろう。それらの負担のなかでも，最も大きな負担が，このコーパス・クリスティ祭における，行進とサイクル劇の上演のための負担であった。

教会関係者もこのお祭りの開催や劇の上演にあたって，かなり親密性を

54　Harris, *The Story of Coventry*, p.97 ; *The Victoria History of the County of Warwick*, Vol.VIII, p.210. クレメンス5世がコーパス・クリスティ祭を正式に制度化した後，コーパス・クリスティ祭の行進はヨーロッパの各国にすみやかに広まっていった。しかし，イングランドでは行進の普及からサイクル劇の上演まで，およそ60年の期間を要している。ウィッカムやコルヴは，黒死病や農民反乱といった社会不安が，新しい盛大な催しの開催を遅らしたのではないかと指摘している（Wickham, *op. cit.*, pp.145-6 ; Kolve, *op. cit.*, p.38.）。

もった対応をしていたようである[55]。サイクル劇の台本をみると，当時のカトリック教会がよくこの劇の上演に快く応じたのか，不思議な感覚にとらわれる。劇が土地の言葉で上演されたことにもよるが，その台詞にあらわれる下劣な表現や，登場人物のあまりにもリアルな性格描写等，聖書にあらわれる人物が当時の現実世界の人間として登場してくる。アベルの忠告に苛立ちを隠せないカイン，女房の扱いにてこずるノア，若い妻をもらったことで妻の不貞を嘆くヨゼフ，普段の生活に愚痴をこぼす3人の羊飼い，キリストの磔をゲーム感覚でおこなう兵士等，さまざまなサイクル劇の作家たちの想像力豊かな脚色や性格描写が随所にあらわれているのである[56]。この劇の上演を許した社会のおおらかさには驚嘆すべき側面がある。こうしたおおらかさが生じた原因は，劇の上演が都市のクラフト・ギルドの面々に委ねられたからに他ならない。なんと自由な中世社会であろうか。

とはいえ，自由のなかにも，そこには厳然とした中世の社会秩序，社会の序列（order）というものが存在したことも事実である[57]。それは行進の順序のなかにあらわれる。行進の中心はあくまでも聖別されたパン，すなわちthe Hostである。この聖体を先導するのが平信徒たち，すなわちクラフト・ギルドの面々であった。そのうち最も栄誉ある場所は聖体のすぐ前ということになる。コヴェントリではこの位置は町の最も古く権威もある絹物商カンパニーがつとめ，その前が反物商カンパニーということになる[58]。こうした

55　Kolve, *op. cit.*, p.50.

56　詳しくは，石井美樹子『イギリス中世劇集』；同『中世劇の世界』を参照。

57　Taylor, op. cit., pp.152-3.

58　*Leet Book*, p.220 ; Sharp, *Dissertation on the Pageants*, p.165 ; Davidson, *op. cit.*, p.91. この序列はおよそ500年をへだてたゴディヴァ（Godiva）の行進にも引き継がれており，行進の主役であるゴディヴァに最も近い位置は絹物商が占めており，その次に反物商が続いている。詳しくは，熊澤喜章「ゴディヴァの行進とコヴェントリ」『明大商学論叢』（明治大学商学研究所），第101巻第3号，2019年を参照。

社会の序列はお祭りに際しても，厳格に守られるべき社会秩序であった[59]。

これは劇の上演の順序にもかかわる。最後の，そして最も大掛かりな舞台を必要とする劇がこの2つのカンパニーに委ねられたのであった。コヴェントリでは9番目の聖母マリアの死と被昇天の劇が絹物商に割り当てられ，最終の最後の審判の劇は反物商が担当したのである。絹物商がマリア劇を担当したのは，絹物商の紋章（arms）に戴冠した聖母マリアが雲上の太陽に昇っていく場面が描かれていることにもよるが，中世カトリックのマリア崇敬を考えると順当な割り当てであっただろう[60]。マリアが天上にあがっていく状況を舞台上でしめすためには，当然，2段構成の舞台が必要であろうし，マリアが天上の舞台へせりあがるための装置が必要とされる。また，最後の審判では，台本の構成にもよるであろうが，スペクタクルな演出であれば天国・地上・地獄の3段の舞台が用意され，地震や火炎を引き起こす装置なども必要とされたであろう[61]。こうした大掛かりな舞台装置を必要とする演目が，コヴェントリのクラフトを代表する2つのカンパニーに割り当てられたのである。このように，行進においても，劇の上演においても，当時の社会秩序，序列をはっきりと確認することが，たとえお祭りの最中であったとしても肝要なことであった[62]。

59　James, op., cit., pp.6-12. ジェームスによれば，コーパス・クリスティの行進は，社会を人体に喩えるような中世の社会観のなかで，中世社会の構成員の序列と神を中心とする社会の一体化を視覚的にあらわしたものだという。社会をさまざまなものに喩えて隠喩的にとらえる中世の社会観に関しては，甚野尚志『中世ヨーロッパの社会観』講談社学術文庫，2007年，を参照。

60　Craig, *English Religious Drama*, p.289 ; Craig, *Two Coventry Corpus Christi Plays*, p.xvi ; King and Davidson, *op., cit.*, pp.41-2.

61　コヴェントリの反物商の会計簿には，火の取り扱いに関する支出が記録されている（*REED : Coventry*, pp.217, 221, 224, 230, 237, etc. ; King and Davidson, *op., cit.*, p.10）。

62　行進においても劇の上演に関しても，社会の序列が重要となるが，それらのなかでひとつでも欠けたものがあれば，社会の一体性を表現するものとはならない。と

とはいえ，お祭りの期間は一時的に社会の階層構造が崩れる無秩序な状況を生み出す。そこでは聖職者も世俗の人々もひとりの人間であり，市長も平民も，クラフトの親方も職人や労働者も，階層的な身分をこえて一体となってお祭りを楽しむ。行進や劇の上演の後には，大量の飲み食いがおこなわれる祝宴が催され，お祭りは最高潮に達する。中世においては仲間内で会合を開き，その後大量の飲み食いがおこなわれ，親睦を深めることがしばしばおこなわれていた。その量たるや圧倒されるほどの量である。劇中に出てくる羊飼いたちの素朴な宴も，同様に大量の食べ物が袋のなかから取りだされる。日々の仕事の辛さ，容易には抜け出せない貧困への愚痴をこぼしながらも，彼らには彼らなりのささやかな喜びがある。やがて，星空の下での宴を楽しむ彼らのもとに，誰よりもはやくキリスト生誕の吉報が天使より告げられる。

こうしたことを考えてみると，このお祭りのひとつの目的が，町の統一，秩序を安寧に保ち，市民同士の諍いを回避することにもあったと思われる[63]。劇を上演したそれぞれのクラフトで，大量の飲み食いの宴が催されたばかりでなく，町の下層を構成する職人や労働者も，サイクル劇の終了後には親方の家でのご馳走にありついたのであった。そして，きっとこのような会話が交わされたのではないだろうか。

「今年のヘロデ役の立ち回りはすごかったよな。」

「○○カンパニーの△△さんの演技も堂に入ってきたなあ。」

「いやあ，あんたの演技には及びもつかないよ。」

「そんなにおだてんなよ。まあ，一杯。」……。

町は一体となり，祝宴は夜遅くまで続く。行進に参加した人々や，劇の上

りわけサイクル劇に関しては，すべての劇が揃ってはじめてひとつの聖書劇となることが，当時においても認識されていた（James, op. cit., pp.15-20）。

63　Harris, *Life in an Old English Town*, pp.335-6 ; do., *The Story of Coventry*, pp.283-4.

演にかかわった人々，そしてそれらを観て楽しんだ人々も，みなそれぞれ満ち足りた気分のうちに眠りにつく。こうして長い一日は，全人類の罪をその死をもって贖い，それによって全人類の救済を約束したイエス・キリストへの感謝の祈りとともに終了するのである。

（くまざわ・よしあき　商学部教授）